



卓 話



イニシエーションスピーチ 「ロータリーに入会して」 橋本 明子会員

好きな言葉に、人生はシャンパンの泡のようなもの、というのがあります。私にとっての大切な一瞬はその時代、その世代、その時時での人との出逢いです。出逢って歩んできた道のりを編みました。



* 子供のころ

1947年11月22日、東京都北区で電気工事会社を営む両親のもと、2人姉弟の長女として生まれました。当時は住居と会社が同じ建物の中にあり、中学校を卒業したばかりの職人さんが常時6~7人住み込んでいました。父は多忙をきわめ、母は心臓病のため慶応病院に入退院を繰り返していたため、大家族の家事は祖母と家政婦さんが仕切っていました。

子供のころからいつも`両親不在`でしたが、寂しさをまぎらわしてくれたのは、職人のお兄ちゃんたちです。賑やかな食卓、夏の海水浴、正月のカルタなど兄妹のように一緒に育ちました。

何よりも嬉しかったのは、母がたまに退院し、在宅している日々でした。片時も離れずにまわりついていてくれたことが遠い日の思い出として甦ります。着物に割烹着をはおり、わたしたち姉弟や職人さん、従業員のためにおやつを作っているときの姿は、幸せそうに輝いていました。居るだけで空気がゆらりと華やぐ。誰に対しても優しく、美しい人でした。

* 入院して知る思いやりの心

母と過ごしたひとときは儚くも短いものでしたが、私自身が母と同じ病院に1年間入院することになるのは中学2年のときです。病名はネフローゼで治療は無塩食療法と安静のみ。寝たきりだけでは退屈なので、母を励ますためにワラ半紙に「めいご新聞」を作成。一方で、私を励まして下さったのは、同じ病棟の特別室で肺がん治療をされていた大作家の吉川英治氏。看護婦さんから私のことを聞いたのでしょうか、「早く元気になってください」とのメッセージのもと、当時慶應幼稚舎の6年生だったお嬢さんの香屋子さんを定期的に私の個室に訪問させて下さった。ご自身も大変なときの優しい心遣いに、つき添いの祖母や病室

の母は大感激、私自身、人を思いやる大切さを子供ながらに実感したものです。

母が黄泉の国へと旅立ったのはそれから2年後のことです。

* 新聞記者になって

父の再婚、父の会社の自社ビル移転と時は流れ、私自身は鷗友学園中・高等部を経て成城大学文芸学部に入學します。大学2年のとき、7歳年上の商社マンと出逢い、双方の親の反対を押し切って彼の赴任先の海外で結婚。残念ながら2年で破局、しよせんは手の届かない高根の人だったのでしよう。

学生生活に戻り、1年遅れの卒業となり、いよいよ社会人としての巣立ちです。スタートはテレビ局でした。ゼミの教授の紹介でしたが、ド派手な社風に、入社したその日からヤル気なしとなり、半年後に退社、産経新聞社に入社しました。

記者生活は掛け値なしで面白かった。締切までに原稿を書く苦しみ、こわいデスク(紙面担当上司)の怒声、要人への夜討ち朝駆け、昼夜を問わず土日祝休みナシの激務、などをさておいても、です。

最初に配属されたのは社会部で、今日は放火取材、明日は美術館探訪、あさっては強盗事件、次は世界的VIPをインタビューといった具合に毎日毎日に変化し、緊張し、刺激的で、のめりこんでいきました。

* 伝説的記者の教え

そんな`浮き草`稼業の日々、ある先輩と出逢います。ベトナム特派員として、一国の首都の陥落という決定的瞬間を、連日署名原稿で紙面を飾っていました。そして、戦争終結の10年後、45歳の若さで急逝、弔辞を詠んだ、同じく社の先輩である作家の司馬遼太郎氏をして「不世出の新聞記者」と惜しまれた。「彼」は言っていました、「誰もが自分と同じ恵まれた境遇におかれているのではない」と。

「彼」の卓越した知性と慧眼には遥か及ばないものの、相手の立場にたって考え、多角的視点で事象をみるという教えは、心に刻んでいるつもりです。

その関連でライフワークとして取り組んだのがキッチン・ドリンクー、児童虐待、飲酒運転による交通事故被害者や犯罪被害者の問題です。豊かな時代の一方で、声をあげられずに苦悩している一群がいる。10~20年も前に連載した当初は世論からは無視され、学者のセンセイたちから「女だてらにアル中だなんて」「親が子供を虐待するわけないでしょう」と嘲笑される始末。そんな外野席の雑音をバネに、志の高い弁護士や医師、刑事、心理士などの協力で、

社の上司・同僚との連携プレーでいい仕事ができ、今日の児童虐待防止法、飲酒運転禁止法、犯罪被害者保護法へとつながった、と信じています。

*再婚しました

36歳のときです。イケメン系は最初の結婚でヤケドしましたので、再婚相手はごく普通の銀行マン、現橋本電気取締役です。戸籍上の苗字は変わりましたが、仕事上では従来通り橋本姓を通しています。

*コペルニクスの転換の到来

20年間にわたる記者稼業に区切りをつけて新聞社を退社、執筆業と海外取材で多忙をきわめていた5年前、大きな転機が訪れました。

父から橋本電気の後継の話がきたのです。青天の霹靂ともいえる事態に、当然のことながら答えは「ノー」。しかし、スゴスゴと引き下がる御仁ではありません。親友たちに相談したところ、異口同音「やってみたら」。ただし第一印象が「ブスツとして最悪」だそうで「笑顔、笑顔」とのご進言。結局、老いた親には逆らえないと一大決意、浪花節ですな人生は。

*橋本電気株式会社とは

入社したのは、2005年9月です。

橋本電気(株)は現会長である父・橋本義雄が1958年に資本金1億円で設立、60年の歴史と信頼を誇る老舗です。従業員数は東京本社、北陸支店あわせて70人。業務内容は電気工事、電気通信工事、官工事の設計・施工などで、スーパーゼネコンや官公庁、施主さんの「直請け」が90%以上です。

事業内容はビル、学校、病院、大使館、社寺、レジャー施設、工場、ホテル、ゴルフ場など。高度で精緻な技術力を軸に、ベテランと若手がチームワークを組む優秀なスタッフと、縁の下の力持ちである下請けの職人さんたちが屋台骨を支えています。

入社して嬉しかったことは、子供時代に一緒に育った「兄貴たち」との50年ぶりの再会でした。今なお、裏方として現場を守ってくれています。

*何ができるのか・できないのか

今さら電気の専門的技術や設計図を勉強しても、会長チルドレンは粒揃いの技術者たちですから、歯がたちません。資格取得も難しい。

師匠でもある会長は、手取り足取り「経営とは」「現場とは」「営業とは」などと伝授するタイプでは全くなく、「一度教わったら、あとは自分で考えろ」。

会長は最前線で働く社員や職人を何よりも大切にしますので、私も現場回りから始めました。炎天下の、あるいは極寒の現場で日夜、汗まみれ泥まみれになり、お客のニーズに応えるため走り回る姿に接し、働き甲斐のある環境づくりの大切さを痛感しています。得意先回りも重要な仕事で、現場を指揮する工事長さんや主任さんに接し、お叱りや指導を受けながら信頼関係の構築に努力しています。

経営戦略、利潤、黒字など数字ありきの課題は山積みですが、ローマは1日にしてならず、人との和を大切にしながら誠実に明るく根気よく取り組んでいきたいと思ひます。

*新たなる出逢い

生活サイクルは180度変わり、趣味にはゴルフが新たに加わりました。

交友録もしかりです。どの世界にも素晴らしい人たちがいて、出逢えて良かった、と実感しています。得意先関係では、敏腕営業マンや工事長さんたちと知己を得、いろいろと教えて頂いております。

岩野会員との出逢いも大きな財産です。由緒あるロータリークラブへお誘いをいただき、入会させていただきました。少しでもお役に立てるよう心がけますので、よろしくお願ひいたします。

イニシエーションスピーチ

渡邊 治利会員

私は、昭和38年1月17日東京都板橋区大山町に衣料品関係の事業を営む両親のもと長男として生まれました。地元の板橋区立第六小学校を経て、新宿区にある私立早稲田中学、高校へと進学いたしました。



*幼少～大学時代

父は仕事の関係で出張が多く、母も仕事をしておりましたので、小学校時代は夏休みなど長期の休みに入ると、いつも初日から休み明け登校前日のギリギリまで三重県伊勢にある母の実家の祖父母の家に預けられていました。最近では考えられないことかもしれませんが、私の子供時代の記憶の限りでは、小学校3年生の頃には、新幹線、近鉄特急と乗り継いで一人で東京から伊勢まで行っていた記憶があります。両親には「男なんだから、分らなかつたら、回りの大人の人に聞きなさい」とよく言い込まれた覚えがあります。

さらに、当時、小学校の同級生から家族で旅行やスキーに行った話を聞き、自分もスキーに行きたいと両親に話したところ、「仕事が忙しいから、一人で行けるのなら行ってきなさい」とのこと。普通は子供に対する断り文句だと思うのですが、私の親は「男なんだから、経験できることは何でもやってみろ!」と言って、小学校5、6年生の時、旅行会社のスキーツアーに申込みをしてくれ、一人で夜行バスに乗ってスキーに行きました。今思えば、許した親も勇気があったものだと思います。

中学、高校ではサッカー一部に所属し、毎日、走りこみでボールを追いかける日々を過ごしました。一方でご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが(もしかしたら先輩の方がおられるかもしれませんが・・・)、早稲田中、高校は歴史的に明治、大正、昭和初期の文人、文化人とのゆかりがあり、その関係で中学、高校レベルでは全国的にも有数の蔵書を誇る図書館がありました。こう見えてもとにかく本を読むことが当時から好きで、早稲田中学を希望したの

もこの図書館に行きたかったというのが動機でした。蔦の絡まる木造のニスの匂いの立ち込める古いこの図書館が本当に好きでした。本好きは現在にも至り、いわゆる文字ホリックの状態。暇さえあれば字を追いかけて、字を見ていないと落ち着かない状態です。果てには、社会人になって本を読む時間が取り難くなると速読の講座にまで通う始末です。今現在に至る私という人間の基礎形成はこの時期に醸成されたように感じます。

大学進学にあたっては、当時、将来の仕事に小学校の教員を希望しており、某国立大の教育学部の初等教育に進みましたが、家の事業を手伝うため1ヶ月で退学し、インドへ渡りました。インドでの話は割愛させていただきますが、約1年をインドで過ごした後、知り合いの教授の勧めで専修大学商学部に入學しました。大学生活はお決まりのサークル活動とアルバイトに精を出す典型的なボンクラ大学生でしたが、当時、会計や経営数学の授業が面白く、興味を持った経緯から、3年生を目前に会計の専門学校にダブルスクールを始めました。相変わらず家業の手伝いもしていましたが、会計、税務の知識がついてくると仕事の見方も変わってきました。「数字を通じて見える世界」は私の好奇心をすくぶるくすぐるものでした。

*就職～社会人へ

大学卒業後、昭和61年4月。現在勤務する大同生命（当時は相互会社）に入社しました。

入社と同時に、会社の財務、経営管理を一手に掌る主計部に配属されました。配属翌日から会社の決算作業のため、土日返上で毎日夜中の12時近くまで仕事をさせられました。社会人成り立ての若造の私にとっては、まさに「自分の命を削ってお金に換えている」かに感じたものです。

主計部に2年半所属後、営業研修で6ヶ月間、支社での営業訓練として各地の支社へ短期配属され、飛び込み営業をして歩きまわりました。本来は6ヶ月の研修終了後、支社営業スタッフとして配属を受けるはずでしたが、なぜか営業転出の辞令はなく、また元の主計部に戻され1年と数ヶ月、数字とにらめっこの日々を過ごしました。

その後、27才の時、急に名古屋支社第二営業課長の辞令を受けました。それまで本社の一スタッフとして営業とは全く性質の異なる数字を相手に仕事をしていた私としては、急に課長の辞令をもらっても、当時は「戸惑い」どころか「会社のいやがらせか」と勘繰る始末。会社を本社部門でしか知らなかった私は異動を躊躇しました。

しかし当時、この件を父にボヤキ半分で相談したところ「会社を辞めるのなんていつでもできる。人間として人様から負託を受け、乞われたことに応えられないのならば、どこへ行っても駄目だ。親の事業を当てにしているのであれば、そんな逃げ帰った者を家の商売に入れるつもりはな

い。まず、飛び込んで努力して、それからもう一度考えてみる」と一喝されました。「なるほど」気を取り直して社へ営業課長として赴任してみると、私の知らなかった会社世界と本社では感じ得なかった濃厚な、そして居心地の良い人間関係がありました。あの時、父に一喝されなかったら、今の自分はなかったと思います。

名古屋では約4年勤務。その間、縁あって名古屋の嫁を娶り、その後、埼玉の本庄営業所と秩父営業所の2拠点を管理する営業所長で赴任しました。このころには営業でキャリアアステップを積んでいこうという自信もついていたのですが、2年後には、また、あの主計部配属辞令を受け、主計部収益管理課の係長として本社に戻りました。決算作業要員でのワンポイントかと思っていたら、その後、丸8年を主計部で過ごすこととなり、その間、係長から調査役を経て、本社ライン管理職の会計課長を歴任させていただきました。

ただ、この8年間は会社の事業費予算管理と大阪国税局対応が業務であったため、会社組織を鳥瞰的に見るスキルを養うことができたこと、会社内外に幅広く人脈を作ることができたことが非常に自身の財産になった気がします。またこの間には、日本の生命保険会社としては初めて相互会社から株式会社へ転換する大事業にも携わることができ、米アクチュアリーファームのミリマン&ロバートソン社と稚劣なビジネス英語と片言の日本語でお互いが身振り手振りで、連日、議論したことも良い思い出です。役所とのやり取りにもたくさんのエピソードがありますが、組織人としての秘守義務に抵触しそうなので割愛させていただきます。

その後、本社内で中長期の会社営業計画を立案する営業企画部、支社営業組織を統括する業務部という部門の管理職として全国の支社拠点を飛び回る3年間を過ごし、この平成19年4月、新宿支社長の辞令を拝命。現在に至ります。

実は主計部と業務部というのは、当社組織のなかで事務と営業それぞれを代表する正に最たる部門であり、105周年を迎える当社歴史のなかでこの両部門の管理職をキャリアとして経た職員は皆無であります。

そして、こうした稀有なキャリアを積みさせていただいた私に会社は何を求めているのか？どう振舞うことを期待されているのか、乞われるものは何か、今まさに自問すべき時であり、これまで出会ったたくさんの方に生かされて今在る自分を、どのようにして社会や会社に健全に還元すべきか？ロータリーのクラブ例会に出席し初めてお聞きした「職業奉仕」という言葉と想いは重なるような気がします。

これからの10年はいろいろな意味で自身の人間力が試される時ではないかと感じる昨今であります。